

## ごあいさつ

### ー標本を残すということー

中村 修美



館長に就任してから、早いもので6か月がたとうとしています。この間には、8月12日に累計の来館者が300万人を超えるという嬉しい出来事がありました。当館は

昭和56年11月10日に開館（一般公開は11日）し、平成2年4月に100万人、平成12年8月に200万人を迎え、この度300万人の来館者を迎えることができました。多くの方にご来館いただいたことに感謝し、お礼申し上げます。

また、本年3月1日には、秩父地域の6つの露頭と当館所有の9件の海棲哺乳類化石が国の天然記念物「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」に指定されました。指定された化石標本は、パレオパラドキシア6件、チチブクジラ2件、オガノヒゲクジラ1件ですが、このうちパレオパラドキシアは当館の主要展示として、小鹿野町般若産の実物化石を用いた骨格復元と3体の骨格復元模型、2つの産状模型が常設展示されています。昨年度の企画展「パレオパラドキシア」では、今回指定された化石標本をすべて公開しました。しかしながら、これは限られた期間での公開です。現在は、一部の化石標本を臨時的に展示しています。今年度中には、新たに実物化石や古秩父湾に関する常設展示の準備を進めています。

当地には、大正10年に上武鉄道（現在の秩父鉄道）が開設した秩父鑛物植物標本陳列所が、昭和24年には戦争により荒廃した陳列所を立て直して開館した秩父自然科学博物館がありました。この地では当館も含めて約100年に及ぶ博物館活動が行われてきました。今回指定された化石標本の多くは、当館が開館する前に発見・発掘されたものです。通常ならば大学や国公立の博物館、あるいは採集者個人や収集家が保管し、各地に散逸してしまっても不思議ではありません。それらが秩父の地に保存されたのは、大正時代から続く長い博物館活動があったからだと思います。

一般に博物館というと、展示を見るところの印象が強いと思います。ですが、博物館の活動として、資料を「収集・保管」し、「調査・研究」して、「公開・教育普及」していくことがあります。この「公開・教育普及」事業の一つが、展示です。確かに展示は博物館にとっての主要な事業ですが、「公開・教育普及」では、それ以外にも講座や野外での体験事業、インターネットや印刷物による情報提供など、多様な活動があります。

これら活動のためには、資料に関する調査研究は必須です。逆に言えば、これなしにはオリジナルな情報を提示することはできません。本や文献で調べるだけでなく、改めて標本を調べたり、現地で調査研究したりする必要があります。必要ならば試料を採集し、標本にするための作業を行います。これらの標本は、野外あるいは標本を用いた調査研究から得られた情報とともに、展示や普及事業などに活用され、またさまざまな媒体で公開されることとなります。このときに作成した標本は、通常は登録標本として保管されることとなります。

標本は展示や普及事業などで使用されますが、研究の対象であるとともに、研究結果を支える証拠でもあります。また、研究の進展により研究成果の検証が必要になることがあり、標本を後世でも確認できるように保管、管理しておく必要があります。場合によっては、すぐに資料として登録できないこともあります。のちに重要な発見につながることもあります。「標本を残す」というのは、博物館の重要な使命の一つです。

埼玉には西の山地から東の低湿地まで多様な自然があり、まだ十分に解明されていません。変化の激しい今だからこそ、これらを記録し、その重要性を明らかにする必要がありますし、その資料を後世に残す必要があります。

今後も、多様な標本を収集保管するとともに、オリジナルな情報を発信する魅力ある博物館を目指して進んでいきたいと思っております。皆様のご指導、ご援助をお願いします。

（なかむら おさみ・館長）